

住まいの民俗学の新たな展望――

A・K・バイブリーリン『東スラヴ人の
儀礼と観念における住居』

(一九八三年 レニングラード「ナウカ」出版所)

坂内 徳明

ヨーロッパ・ロシア地域、さらに広く東スラヴ地域を対象としたソ連民族学・民俗学において、「住居」が民族の世界観との関わりの中で正面から論じられることはこれまでまったくなかったと言える。

むろんのことながら、誤解をさけるために指摘しておかねばならぬのは、住居という対象は物質文化を構成する要素の中で最も基本的なものの一つとして、これまでの民族学研究の枠内

でもある意味では十二分に研究されてきた。E・Θ・ブルムクヴィストのモノグラフは概括的ながらも、住居をめぐる問題の所在とその全容を漏らすことなく四百ページにわたって述べており、現在までのところ東スラヴ人の住居に関する最もまとまった仕事である(Bromberg, 1956)。また、歴史・民族誌地図『ロシア人』中の住居の箇所は、建築資材、屋根の形と材料、家屋の外観と内部配置などに関する精緻な分布地図として基本的なデータを提示している(Peckin, 1967)。この二つをヨーロッパ・ロシア地域ならびに東スラヴ地域の住居民族学に関する総論の仕事とするならば、個別地域における住居様式の記述とその歴史の変遷、住居と社会構造の比較などを扱った事例研究はこれまでも数多く行なわれてきた。

にもかかわらず、総論と住居様式の記述や社会構造との比較を目的とする民族誌的研究、ならびに家屋型式の地理的分布と史的変遷に関するいわば文化史的研究をふまえながらもそれらを越えて、東スラヴ人にとって住居の持つ意味とは何かという「普遍的な問題を含む住居論」(石毛、一九七二)の考察はまったくなされなかったのが現状である。住居が当該民族の伝統的文化と世界観をとらえる上で最も基本的な、いわば文化を構成するキー・シンボルのひとつであるとする認識に立つならば、東スラヴ地域を対象とした民族学の中で本格的な住居論が皆無であったことはきわめて奇異な現象であった。一九八三年に出版され、ここに紹介を試みようとする『東スラヴ人の儀礼と観念における住居』(Barbypin, 1983)はそうした空白を文字通

り埋めるものとして、我々の期待を十分満たすものである。

著者ならびに本書の成立について評者の知りえたことは次のとおりである。著者のアリベルト・カシフローヴィチ・バイプーリンはソ連邦科学アカデミー民族学研究所レニングラード支部(付属の民族学博物館の別称によりクンストカメラとも呼ばれる)に働く若手研究者である。彼は一九七六年に「住居建設に結びついたロシア人の儀礼」(BaibypuH, 1976a)のテーマで歴史学博士候補の審査を通過、その際の論文をもとにして本書をまとめたものと思われる(一部すでに発表済みのものは BaibypuH, 1976b, 1979)。

本書は以下に掲げる目次からはっきりとわかるように、住居建設に関連した儀礼、宗教的観念を扱った前半と、住居内空間の記号的性格を論じた後半の二部から構成される。本書の理論的枠組を支えているのは、Д・К・ゼレーニン、П・Г・ボガトウイリョーフらによって着手されたソ連の記号論的民族学研究に対する多大な理解であり、バイプーリンの出発点は、「民家はモノであるだけでなく記号である」という一九三〇年代に行なわれたボガトウイリョーフの指摘(Богатьев, 1971)に求められると言える。また、いわゆるタルトゥー・グループによって推進されてきた文化記号論、フランスを中心とする構造主義的人類学からの影響も大きい。その一方で、建設儀礼や住居に関する言い伝えというこれまで未開拓の領域にあって、十九世紀以来の多数の民族学資料の中から事例を発掘していくという作業はほとんど彼のオリジナルな仕事であり、この地味で

綿密な作業自体高く評価されるものである。しかもこの作業のみにとどまることなく、そこで見出された多くの個別事例を記号論的モデルの中で検証しようとする斬新な試みの中に本書の魅力があると言ってよいだろう。ついでながら、彼は本書で扱った領域以外に、儀礼の空間構成の記述、儀礼の完了／不完了の問題、モノと神話の記号論的関連、民族誌的事実とその記述ならびに解釈の問題といった民族学研究における理論的テーマについて次々と野心的な仕事を発表しつづける(BaibypuH, 1978, 1981a, 1981b, 1982a)。

(1) ほんの数例をあげるならば、ヨーロッパ・ロシア北部における住居と社会構造の関係を論じたすぐれたモノグラフは Витов, 1962。ウクライナにおける最新の成果として Космина, 1980。またロシア農民の家屋内の空間配置と区分、家具備えつけについては Станкович, 1970。最近のシンポジウムとしては「ソ連邦北西部八—十四世紀古代住居建設研究の諸問題」(一九八三年五月、リガ) Советская этнография, 1983, № 6。

(2) 評者は民族学研究所レニングラード支部の定例発表会(一九八二年三月)においてバイプーリンの口頭発表「エチケットと儀礼の相関関係の問題によせて」(BaibypuH, 1982b)を聞いた。この他の彼の仕事については BaibypuH, 1978, 89。さらに婚礼に関する地域研究の問題、フョークロフ伝承者の個性と伝統に関するフィンランド民族学者ペンチキヤインンの仕事の詳細な紹介が行なわれている

(Baikyrin, 1977, 1982a)。

二

本書の構成は以下のとおりである。

予備的注記

第一部 東スラヴ人の建設儀礼

第一章 住居建設に先行する儀礼

第二章 建設テクノロジーの儀礼的側面

第三章 引越しの際の儀礼

第二部 東スラヴ人の住居内部空間の記号論的側面

第一章 内部空間の構造的・タイポロジ的特質(水平面)

第二章 内部空間の記号論(水平面)

第三章 住居の垂直構造

全体で一八八ページで、第一部が約三分の二を占めている。

まず著者は、序ともいふべき予備的注記の箇所において本書で扱う問題を次の二点にまとめている。それは、(一)人間が所有する環境のメカニズムの機能化の原則を明らかにすること、言いかえれば「自然」から「文化」へ、「非所有」から「所有」へという再編のメカニズムとは何か、それに関連して空間のドメスティケーションの伝統的モデルを説明すること。その際に前提となっているのは、住居建設と引越しにともなう儀礼が世界の獲得に関する伝統的図式を伝達する手段であるという認識

である。(二)東スラヴ人の伝統的・象徴的な空間組織化の特質、ならびに住居の個々の部分の記号論的役割を説明すること。特に空間の価値に対するアクセントの置き方に注目して住居空間の意味論的記述を行なうこと、の二点である。

この二つの課題はそれぞれ本書の第一部、第二部と対応しているが、これらは論理的にも構造的にも分かちがたく結びつき、住居を文化現象として考察しようとする一つの目的に収斂されると記されている。

このような基本的視角の提示にもとづき、それを支える著者の理論的・作業的基盤とも言うべきものがあげられる。それは、(一)東スラヴ人の伝統的世界像における住居のイメージ、ならびに神話的世界観の再建の問題、(二)伝統の伝達・継承のメカニズムの問題、儀礼論、(三)文化モデル、文化記号論、モノの歴史と記号性の変遷の問題、(四)住居と儀礼の相関関係とそのタイプの問題、(五)世界の文化的所有、文化の時間・空間的再編の問題、そして最後に(六)資料と研究史の問題の六点であり、それらについて著者の理論的枠組が素描されている。その各々に関してここで紹介し検討する余裕はないので、住居をめぐる以下で具体的に論旨を追う中でそれらの枠組がいかなる形で用いられているかを見ていくこととする。

第一部で扱われている建設儀礼(ここにはいわゆる建設に先立つ部分と新居完成後に家移りを行なう場合の儀礼も含む)は、ソ連民族学の中ではこれまで特に研究の少なかった分野である。先述のプロムクヴィストのモノグラフではこの儀礼に対しわず

か三ページがあてられているにすぎないし、この十数年来多くの成果を生み出している婚礼研究を中心としたソ連の儀礼研究の発展(坂内、一九八三)の中にあっても建設儀礼については、評者の知る限り、まったく論じられていない。

住居建設に先立って行なわれる儀礼ならびにそれに結びついた観念を扱った第一章では、建築のために必要な資材、時間、場所の三つの条件の選択がいかに行なわれるかが検証されている。例えば木材については、いわゆる聖なる木、また逆に呪われた木として伐採のタブー化した木にかなるものがあるかについて述べられる(孤木、かつて教会・礼拝堂・墓地のあった場所に生えた木、奇形の木、枯木、老木、またモミ、松、菩提樹など)。ここで興味をひくのは「勢いのよい、生長力の大きな木」も特殊な力を秘めているとして伐採を禁止されているという事例である。この木の特徴として注目すべきなのは、この種の木が森の中の道、また辻に生えることである。この「勢いのよい」という言葉 *bun'yi* の語根 *bun* が一部の北部方言で「境界」「墓地」「畔」「教会の柵」を意味することを考えあわせるならば、この木をめぐる伝承には「境界性」の持つ力の反映が認められる。

家を建てる場所の選定というモメントは、素材の場合と同様に建ててはならぬ場所というタブーとして表現され、「中心」から離れるにつれての危険度・不浄度の増大とデモノロジーとの関わりによってとらえられている(風呂小屋の不浄性とその位置)。また、場所選びの際にごく一般的に行なわれる占いと

儀礼行為の事例が分析される。最も単純な占いの方法は、主人が未来の家となる空間の四隅に穀物、石などを置くというもののだが、これは隅のマーク化、家とそれ以外の空間との境界のマーク化であり、それによって中心と周縁、内と外、家と家以外という区分が与えられるという。場所選定に関わる儀礼行為は空間の秩序化・構造化のプロセスを反映したものであるとされている。

つづく第二章で扱われているのは現実の建築行為に関わる民族誌的事実の検討(狭義のテクノロジー、それについては [Laurkan, 1967] ではない)。まずバイブリーンは「建てる」を意味するロシア語 *строит* がたんに建設行為だけではなく、無秩序を秩序化する、空間的・時間的・社会的・宗教的な秩序を確立するという意味を持つことを指摘し、家を建てるという行為の神話的基盤を確認する。そして壁、扉、窓、屋根、桁といった各部分が建造されていく中でいかに構造化していくのかが多くのフォークロア資料によって述べられている。この章で彼が論じている問題はきわめて多岐にわたり、人柱儀礼と神話的世界創造、大工の霊力と異人性、住居と人間の身体対応などの問題についても論及されている。

家移りに関する儀礼と観念とは、バイブリーンによれば、まず何よりも新居が正常な生活に不可欠な質を持っているかどうかの検証行為である。このことは家人が新居へはいる前に動物―猫、鶏など―を放つという広く流布した行為に認められる。しかも動物から人間へというプロセスの中には世界創造に通ず

る神話性が反映しているという。⁽²⁾

次に家の精をはじめとかまどの火、ごみ、聖像画などを新居へ移動することは、社会的・経済的・文化的レベルにおける新／旧の対立の除去を意味する。また家人が新居へはじめてはいっていく際の順序には老／若、年上／年下、主人／彼以外の者、男性／女性といった対立が見られるという。しかし最も興味深いのは粥の移動にまつわる儀礼である。⁽³⁾すなわち、まだ焚きあがっていない粥を新居へ運び、その新しいかまどで焚きあげることは新旧のかまどの継承性を象徴化しており、引越しの意味論——獲得された文化を完全に獲得する行為の統合としての——と密接に結びついているのである。もっとも引越しが完了したからといって住居が完全に「獲得された」(清められた)わけではなく、そのためには「家は婚礼か葬式によってあかを落とす」という諺にみられるとおり、通過儀礼が行なわれなくてはならぬという。ここで言及された通過儀礼との関連で述べるならば、バイブリーンは儀礼全体の中での建設儀礼の位置づけ、他の儀礼との比較といった領域までには論及していない。わずかに、この種の儀礼が定期的に反復される儀礼とは異なった「偶因論的」儀礼であるが、構造的特徴ならびに、儀礼のシェーマに対する生の導入という一般的傾向の点で両者は類似していると述べるにとどまっている。

(1) ヴォログダ県の言い伝えによれば、この種の木には「特別な性格が与えられている、つまり秘められた破壊力が備わっており、魔術師だけが占いによってその力を示す

ことができる。この木を根元から伐採し、家の壁の丸太の間にいれたならば、それがもつて建物全体がこわれ、主人はその木片に押しつぶされる。その木端ですら水車小屋をこわす力を持っている」(Масинов, 1903)

(2) 白ロシアの事例として「動物たちは新居で六日間を過ごす。第一日に鶏、二日にガチョウか猫、それに続いて子豚、羊、牛、六日目には馬、七日目になって主人が火とパン、こね粉を手にして引越してくる」(Zelenin, 1927)

(3) 次の事例を参照。「放棄する旧宅で主婦は暖炉に最後の点火をし粥を焚く。清潔な布で鉢をくるみ、四方に礼をして言う——あるじさま、奥さんと子供を連れて、今までの同様の家畜と人たちのいる新居へいらっしゃい——。それから炉の火を消し、粥のはいった鍋を新居へ運ぶ。そこでは新しい炉の上で最初の点火を行ない、持参した粥を焚きあげる」(Kaphaykora, 1934)

三

第二部に移ろう。ヨーロッパ・ロシア地域におけるロシア人住居の空間配置の基本的特徴として、今世紀初頭以来のロシア・ソビエト民族学研究が確認してきたことは以下の点である。すなわち、暖炉の位置、聖なる隅(日本の上座にあたり、聖像画が掲げられる一角のこと、赤い隅とも呼ばれる)、そして暖炉の口の向きの三つの指標によって四つの地域別タイプ(中央ロシア北部型、南ロシア東部型、同西部型、西ロシア型)が存

在すること、そしてこの四つのタイプに共通する点として、聖なる隅と暖炉とが対角線の位置にあることがそれである。バイブリーンはこの事実を認めながらもそれをおしすすめて新たな視点からこの問題を再考察しようとする。彼は、不十分ながらも現在まで知りうる考古学資料などにもとづいて住居内部の配置の歴史的交流をたどり、それを通して、聖なる隅が入口近くに位置する南部大ロシア型が北部ロシア型よりも古く、ロシア人住居のアーキタイプであるとする。同時に彼は、聖なる隅と暖炉との位置関係を方位、宗教的・神話的世界認識、女性の役割などを指標としてとらえ直そうとする。それによれば、

教

暖炉↓北・西・隅、日の入、悪魔、女性空間、異教

といった不完全ながらも二分法的な対立を含んでおり、それゆえに聖なる隅と暖炉との対角線は一般に考えられているよりもはるかに強い、安定した結びつきであるという(第一章)。

こうした住居内空間の構造的特徴を指摘した彼は、つづく第二、第三章で内部空間の記号論を展開しようとする。その際に彼は前提として、住居を住居として成立させ、そのステータスを保障する構成要素が境界としての機能を持っていることを確認する。この境界機能は壁、屋根、床といった本来境界とみなされるものだけでなく、暖炉や机などにも備わっており、したがって住居は境界の体系として、境界によって生み出された場所の体系としてとらえることができるという。⁽¹⁾

このような境界機能を備えた住居の構成部分の中で床と屋根を扱った第三章は分量も少なく論旨も十分に展開されていないが、第二章では扉と窓、桁、赤い隅、暖炉とその隅をあげてそれら水平面の構成部分の記号性を論証している。例をあげよう。扉と窓は、境界の断絶性と通過性とのパラドクスの結びつきという形で境界機能を最もはっきりと体現しており、その記号論的意味はきわめて大きい。そしてこのことは何よりも錠や鍵、カンスキに関する諺や謎々、また扉、敷居の聖別行為に示されている。扉近くで行なわれるあらゆる行為には高度の記号性が備わっており、例えば他人の家へはいる際に敷居の所で祈りとともに立止まるというごく一般的に見られる行為は、開始(入口)と終了(出口)のマーク化によって特徴的な手段であると解釈されている(さらには、特に出産や葬式を中心とした儀礼における敷居の役割を参照)。また扉と窓とは通過性、外界との結合、断絶性といった出入口のイデーの上で結びつくにもかかわらず、窓は独自の性格を持つ。すなわち窓は家と家以外の世界とを結びつけるだけでなく、太陽、月、方位、光と闇や昼と夜、夏と冬の交替といった宇宙現象とそのプロセスの世界と家とを結びつけるという。さらに窓と死者の世界ならびに女性とのシンボリックな結びつきについても多くのフォークロア資料をあげて述べている。

「赤い」隅と(前の、上の、年長の、尊敬すべき、聖なる、神の、第一の隅とも)呼ばれる一角は東・南に位置しており、家の中では最も価値ある空間として住居内のすべての部分がこ

の隅との関連で定位されている。したがって宗教的・儀礼的行為の多くがこと結びつき、机、聖像画、聖書、十字架、燈明、後世になっての故人の写真など最上の文化的価値を持つものがここに置かれるのは当然である。入口から見て机の背後にあるこの空間が記号論的性格を持つことは、住居内空間の価値が聖像画の下隅に向かって高まっていくこと（家長がすわることに示されており、ここには主人（上）／年少者（下）という対立のみならず男／女の対立も見出される。この空間の記号化の例が興味深いのは、「中心」に向かうにしがって空間の価値が高まっていくという一般の原則があてはまらないにもかかわらず、通常のトボグラフィでは周縁とされる隅がまさに「中心」となっているために象徴的解釈の上では原則自体がくずれていないという点である。さらに、婚礼における「花婿、花嫁のテキスト」、「座の言語」（誰がどの場合にどこに着席するか）の分析を通じて赤い隅と儀礼との関連が述べられるほか、東スラヴ地域に特徴的な机の位置の定着性とその儀礼的移動、住居の「中心」と「周縁」をつなぐ板寝床（壁に取りつけられた板長椅子）の儀礼的ステータスの問題についても論じられている。さらには小屋内での通常のトボグラフィ上の中央部は、赤い隅に比較して儀礼的役割の小さいことについても指摘されている。

(1) 文化における境界の役割を述べた次の言葉を参照。

「文化のテキストにおける境界は、現実のテキスト——空間的特徴を持つものも持たぬものも——の諸要素のインバ

リアントとして現われうる」(Jortman, 1969)

四

本書は儀礼、信仰、フォークロアさらに神話テキストを資料として、東スラヴ人の住居の象徴性を再構成しようとする試みである。前半では建設儀礼の分析を通して空間獲得のメカニズムが解明され、後半の第二部では住居内空間の構成部分の記号論的側面が指摘されている。もっとも、この前半と後半とは、著者の意図にもかかわらず、若干の非連続的な感じを与えている。また、住居論であるとはいえ、本書が住居と建設に関する問題のすべてにふれているわけではないことはむしろである。したがって各所に見出される興味深い指摘は今後さらにそれぞれが大きな問題へと展開できる可能性を含んでいる。そうした例をいくつかあげるならば、先にふれた「生長力の大きな木」の伝承はその境界性の問題をより広く展開できるであろう。また、小屋内で死者の頭は一般には赤い隅に向けられるのに対し、ギリシヤ正教正統派から分離した旧教徒の風習では赤い隅に足を向けるといふ事例が紹介されているが、これは異端派の世界観における住居空間論として大きな問題を含むものである。さらには、住居建設や引越しの際に見出される隣人、近親者、村人の参加という側面は、本書ではほとんど論じられていないが、M・M・グロムウイコ⁽¹⁾の最近の仕事 (Ponomarev, 1982) を考慮にいれるならば建設儀礼の全体像をより明確にしうるであろう。思いつくままにあげたこれらの問題の考察は、住居をより大き

なコンテキストでとらえる上で重要な課題のひとつとなろう。また、日本における屋移り粥や住居内の空間構成(柳田・山口一九三九、宮田、一九八一)との比較タイポロジー的研究も我々にとっては興味のあるテーマである。

本書の意義は東スラヴ人の住居を通じてひとつの文化モデルを提出した点にある。著者バイブーリンは具体的な個別事例に依拠しつつも、それらを文化記号論的モデルと、それにもとづく「文化現象としての住居」論によって再構成したのであり、そこにおいて重要なのは「記号としての住居」(長島、一九七四)という視点の確認であった。

(1) グロムツィコが文献によって調査を行なった協同労働の慣行に関する事例百余り(二九鼎七〇郡)の中で「新居建設」「新居用木材の運搬」「屋根葺」「土古運搬」などの事例は約二〇である。また、最近刊行されたヨーロッパ・ロシア北部の伝統的農民生活に関する、作家ウァシーリイ・ハロフによるルボルタージュ『調和』には協同労働の仕事の内容が記されており、その第一番目に家、穀物小屋の建設があがっているのは興味深い(Белов, В. И. Лад. М., 1982)。

参考文献

- Байбурин А. К.
1976а Русские народные обряды, связанные со строительством жилища. Автореферат канд. дис. JL.
1976б Обряды при переходе в новый дом у восточных

славян. Советская этнография, № 5.
1977 К ареальному изучению русского свадебного обряда. В кн.: Ареальные исследования в языкознании и этнографии. JL.

1978 К описанию организации пространства в восточнославянской свадьбе (с Г. А. Ленинтоном). JL.

1979 «Строительная жертва» и связанные с нею ритуальные символы у восточных славян. В кн.: Проблемы славянской этнографии. JL.

1981а К истолкованию нескольких случаев ритуальной завершенности/незавершенности. В кн.: Структура текста-81. М.

1981б Семiotический статус вещей и мифология. В кн.: СМАЭ, XXVII JL.

1982а Некоторые вопросы изучения объективированных форм культуры. СМАЭ, XXXVIII. JL.

1982б К вопросу соотношения этикета и ритуала. Доклад в Научной сессии Института этнографии. JL.

1982в Проблема «личность и традиция» в трудах Ю. Пентикийнена. СЭ, № 2.

1983 Жинише в обрядах и представлениях восточных славян. JL.

Бломквист Е. Э.

1956 Крестьянские постройки русских, украинцев и

- белорусов. В кн.: Восточнославянский этнографический сборник. М.
- Богатырев П. Г.
- 1971 Вопросы теории народного искусства. М.
- Витов М. В.
- 1962 Историко-географические очерки Заонежья. М.
- Ганикая О. А.
- 1967 Строительная техника русских крестьян. В кн.: Русские. М.
- Громько М. М.
- 1981 Обычай помочей у русских крестьян в XIX в. СЭ, № 4 и 5.
- Карнаухова И. В.
- 1934 Сказки и предания северного края. М.-Л.
- Космина Т. В.
- 1980 Сельское жилище Подолки (на украинском языке). Киев.
- Лютман Ю. М.
- 1969 О метазыке типологических описаний культуры. Труды по знаковым системам, 4.
- Максимов С. В.
- 1903 Нечистая, неведомая и крестная сила. СПб. Русские
- 1967 Историко-этнографический атлас. М.
- Станюкович Г. В.
- 1970 Внутренняя планировка, отделка и меблировка русского крестьянского жилища. В кн.: Русские. М.
- Zelenin D. K.
- 1927 Russische (Ostslawische) Volkskunde. Berlin, Leipzig.
- 石毛直道
- 一九七一『住居空間の人類学』鹿島出版会
- 長島信弘
- 一九七四『住居の象徴性』月刊『言語』別冊一
- 坂内徳明
- 一九八三『ソビエト民俗学における婚礼研究の動向』『なろう』
- ケネッп
- アルノルト・フアン
- 一九七七『通過儀礼』(綾部恒雄他訳) 弘文堂
- 宮田登
- 一九八一『家のフォークロア』『見える家と見えない家』岩波書店
- 柳田国男
- 山口貞夫
- 一九三九『居住習俗語彙』民間伝承の会

(一橋大学助教授)